

1 なぜ「登戸」研究所なのか

登戸研究所（現：明治大学生田キャンパス他）の所在地は、生田村であり登戸ではありませんでした。では、なぜ軍は「生田」研究所ではなく、「登戸」研究所としたのでしょうか。その謎を解明します。



稲田町全圖

登戸研究所があった場所は生田村であり、登戸は少し離れた場所にあることがわかる。

※この地図は登戸研究所開設以前に発行されたため、日本高等拓植学校が示されています。

1934（昭和9）年 井上金兵衛発行（森田忠正氏所蔵）

(1) 小田急線との関連性

① 通勤

まず、「登戸」研究所とした理由で一番に考えられるのは、「稲田登戸」駅（現・向ヶ丘遊園駅）名に由来したということでしょう。

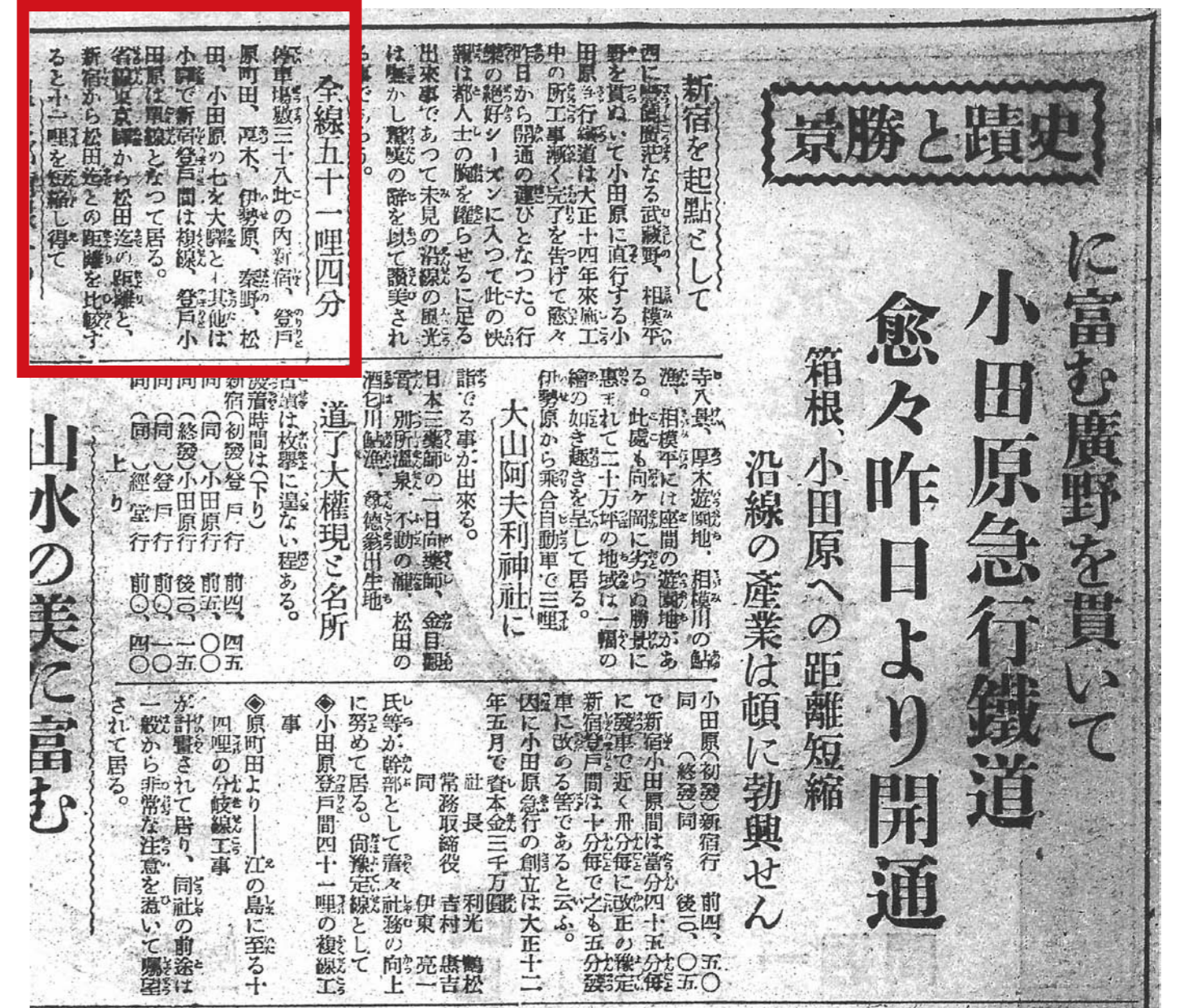
登戸研究所の最寄駅は、今の明治大学生田キャンパスと変わらず、東生田駅（現・生田駅）でした。しかし、電車通勤をする所員の多くは、東生田駅よりも稲田登戸駅を利用していたようです。それは何故なのでしょう。以下の理由が考えられます。

- ・ 稲田登戸駅には急行が停車する。
- ・ 新宿からの直通電車は稲田登戸駅が終点であり、東生田駅に行くためには、各駅停車に乗り換えなければいけない。
- ・ 稲田登戸駅からの各駅停車は1時間に2本程度の電車しかない。
- ・ 東生田駅から登戸研究所までの道が1943（昭和18）年まで、整備されていなかった。

以上より、稲田登戸駅の方が東生田駅よりも利便性が高く利用しやすかったということが解ります。

②大 駅

小田急線は1927（昭和2）年に開通します。中でも稲田登戸（現・向ヶ丘遊園）、新原町田（現・町田）、相模厚木（現・本厚木）、大秦野（現・秦野）、新松田は起点終点駅と併せて「大駅」と呼ばれ、それ以外の「小駅」と区別していたことが右の『都新聞』より解ります。大駅は急行停車駅かつ交通の要所であり、他線との乗り換えポイントでもある重要な駅でした。この点から、東生田駅よりも稲田登戸駅の方が広く知られていた駅だと言えます。

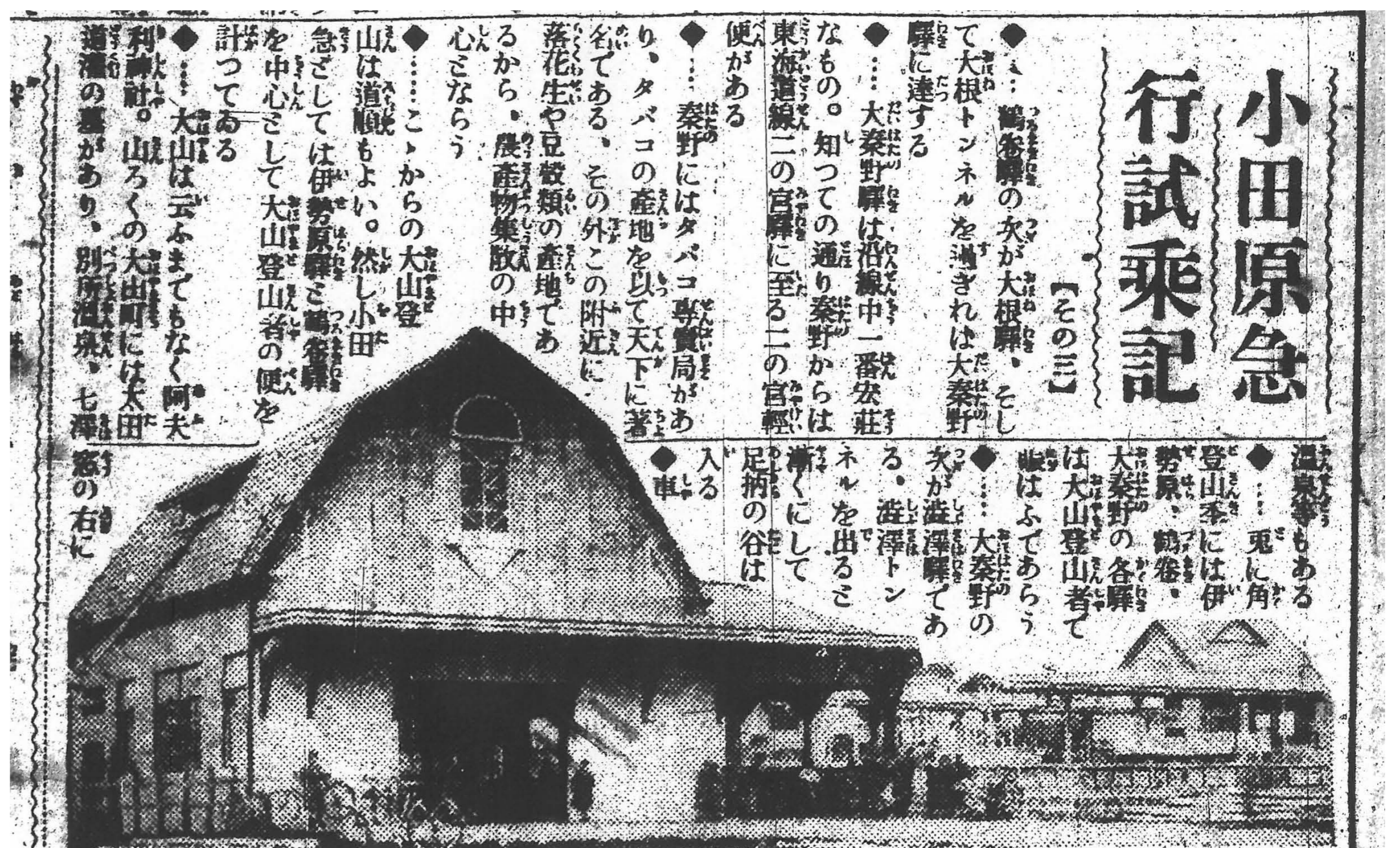


1927（昭和2）年4月2日付『都新聞』5面（横浜市立中央図書館所蔵）



現在の向ヶ丘遊園（稲田登戸）駅

今も創業以来の駅舎を保っているのは、向ヶ丘遊園駅のみ。（2016年資料館撮影）

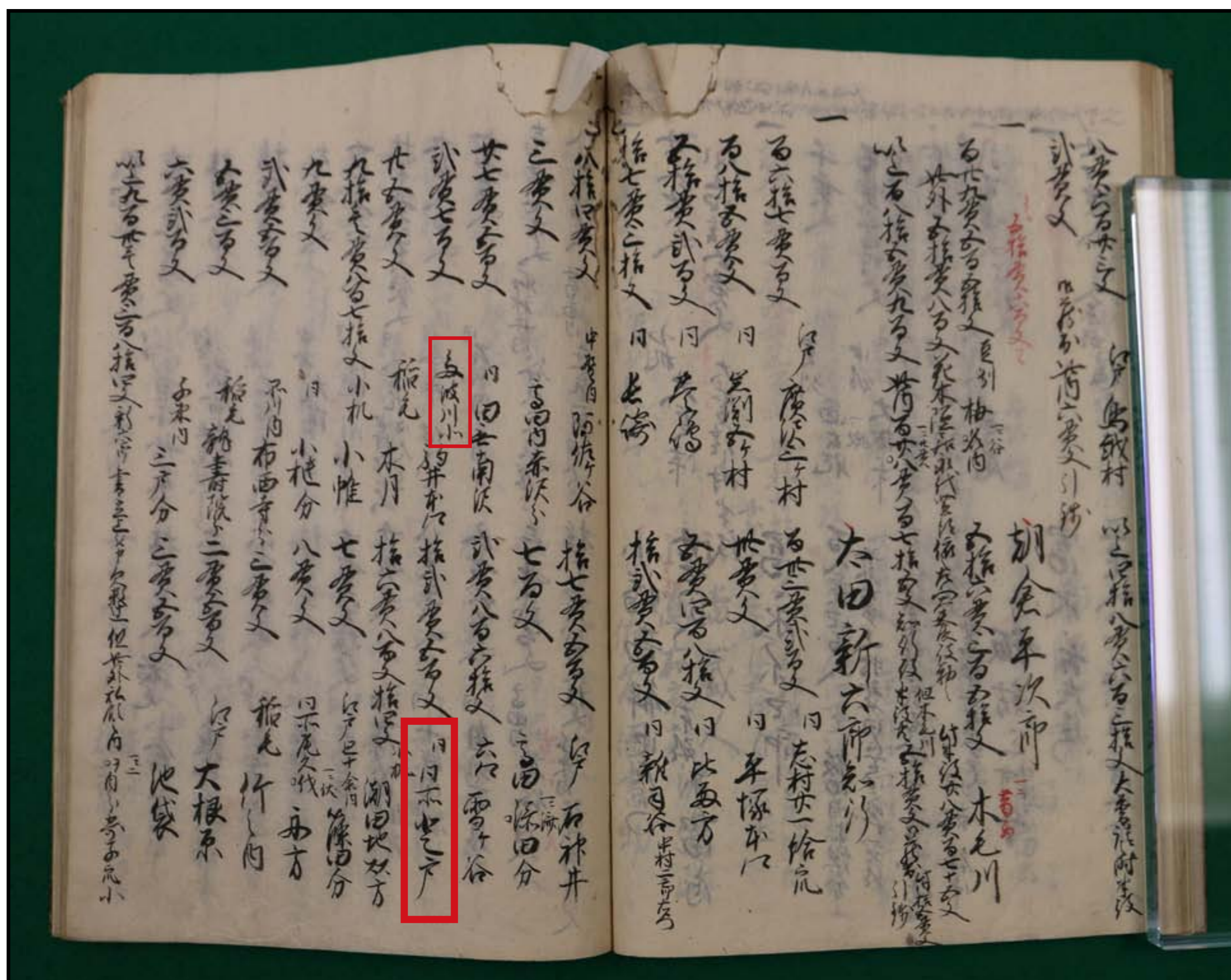


開業当時の秦野（大秦野）駅

「大駅」の駅舎デザインは統一され、「小駅」と区別された。

1927（昭和2）年4月3日付『横浜毎朝新報』3面（横浜市立中央図書館所蔵）

(2) 地名と軍事施設の関係



『小田原衆所領役帳：永禄2年2月12日』より北条氏康が作らせたもの。「多波川（多摩川）北」「登戸」とあるのは、当時、多摩川は登戸の南側を流れていたため。

1846（弘化6）年写（明治大学図書館所蔵）

「生田」は1878（明治11）年に五反田村と上菅生村が合併し、それぞれ下の一字を取って「生田村」と命名した比較的新しい地名でした。その一方で、「登戸」という地名は、16世紀に作成された所領役帳で確認することができます（前図赤枠部参照）。

また、多摩川を渡るための「登戸の渡し」は、古くから江戸への往還に重要な役割を果たしていたことから、「登戸」は「生田」よりも知名度が高かったと言えます。

そのため、研究所名に「登戸」を付けることで、現小田急線登戸駅～向ヶ丘遊園駅周辺に施設があるように見せかけ、場所を第三者から特定できないようにし、情報攪乱^{かくらん}を狙ったと考えられます。

このような例は、他の軍事施設にもみられます。例えば、旧厚木航空基地（現・厚木海軍飛行場）は現大和市・綾瀬市・海老名市にあり、厚木市とは関係がありません。しかし「厚木」と付けられています。

(3) 日本高等拓植学校時代の呼び方

登戸研究所が開設される以前、同地には日本高等拓植学校がありました（日本高等拓植学校については第一展示室に詳しい解説があります）。では同校は「生田」と「登戸」どちらを使用していたのでしょうか。

日本高等拓植学校が国土館高等拓植学校より独立し、生田に移転することを報告する資料には、次のよう書かれています。

外務省宛高等拓植学校第二回生渡伯*報告 *「伯」とはブラジルのこと

昭和七年四月八日

国土館高等拓植学校長 上塚司

(前略)

尚本校は今回神奈川県橘樹郡生田村（小田原急行鉄道東生田駅下車）に校地四万坪を得、約六百坪の校舎を新築し四月一日移転、第三回生百名を収容し開校致候間一層の御高庇を御願申上候

(後略)

『本邦移民保護奨励並救済関係雑件 伯国ノ部 第8冊』より
(外務省外交史料館蔵)

財団法人国土館役員現況報告

昭和九年七月二十日

財団法人国土館 理事代表代理 副島義一

(前略)

別ニ日本高等拓植学校ヲ創立シ神奈川県稲田登戸ニ校舎ヲ新築セルニ端ヲ発シ

(後略)

「戊学六七二五号役員変更届ノ件進達」より（東京都公文書館所蔵）

日本高等拓植学校では、生田と登戸の使い分けは特に行っていなかったようです。

また、1945（昭和20）～50（昭和25）年まで登戸研究所跡地に仮校舎を開設した慶應義塾大学は「登戸仮校舎」と呼んでいました。